

サバティカル期間における研究経過・成果報告書

令和8年 5月 7日	
国立大学法人茨城大学長 殿	
所属・職名 人文社会科学野・教授	
氏 名 添田 仁	
下記のとおり、サバティカル期間が満了しましたので、研究経過・成果等を提出いたします。	
サバティカル制度を利用した期間	令和7年 4月 1日 ～ 令和8年 3月 31日

①研究経過について （利用期間を月単位などに区分して、具体的な研究経過を記入して下さい。）	ライデン大学地域研究所（LIAS／Ivo・Smits教授）に拠点を置き、「近世日本の海防戦略と蘭学研究」というテーマで調査・研究を行った。 4月～5月中旬は研究環境の整備を進めた。5月下旬～7月上旬はライデン大学中央図書館、ライデン図書館・芸術文化センターを中心に、幕末維新期の長崎居留地やオランダ海軍の軍事技術に関する研究文献の調査を行った。7月中旬～8月は一時帰国し、長崎歴史文化博物館、山口県立文書館、茨城県立歴史館、生野書院を中心に、幕末期の幕府・大名が進めた海防政策および軍事技術官僚の動向に関する調査を行った。9月～12月は、ライデン国立民族学博物館、ロッテルダム海事博物館を中心に、出島オランダ商館長や医官が収集した海防関係資料に関する調査を行った。1月～3月中旬は、シーボルトハウス（ライデン）、アムステルダム海事博物館、オランダ国立公文書館（ハーグ）を中心に、開港期の日本沿岸の海図および横浜・長崎のオランダ領事館に関する調査を行った。これらの史料調査と並行して、オランダの博物館・美術館における歴史展示を閲覧し、その特徴を調査した。
②研究成果について （目標の達成状況及び研究成果の公表予定について記入して下さい。）	研究テーマである「近世日本の海防戦略と蘭学研究」に関わる歴史資料の収集という当初の目標は十分に達成できた。また、科研費（基盤研究C）の課題「開港場建設における軍事動員と地域社会－幕府海軍の炭鉱開発を中心に－」の成果を充実させることができた。 なかでもオランダ国立公文書館では、幕末維新期のオランダ（総）領事館（Consuraat yokohama）の文書群を調査し、長崎・横浜の居留地関係資料、とくに横浜のオランダ石炭貯蔵庫や海軍病院等に関する記録を収集することができた。オランダ海軍と居留地および周辺の地域社会との関係史研究について新視点を提供する素材として期待できる。一方、国内の調査でも、幕府海軍の創設に尽力した人物の日記、長崎・大坂といった主要港湾で海防の軍役を務めた諸藩の帳簿のような根幹的な記録を多数収集することができた。いずれも長期間の調査を要するものであり、サバティカル期間を有効に活用できた。また、ライデン大学図書館で収集した文献類も、日本国内では入手が困難なものが含まれており、貴重な成果と言える。 研究成果については、幕末期の軍事技術および技術官僚の人脈を通じた文化交流に関する調査成果の一部として、「幕末の鉱山社会と遊芸」（『人文社会科学論集』5、2026年2月）、『生野銀山石川家資料叢書 第3集 幕末石炭採掘関係史料 補遺』（生野銀山石川家文書の魅力を語る会、2026年3月）を公表することができた。また、幕末期の海防戦略に関する成果として「神戸開港前夜の炭鉱開発－生野銀山石川伊兵衛の挑戦－」を成稿し、高久智広編『将軍の港 兵庫・神戸－幕末の海防・開港と港湾都市構想』（戎光祥出版、2026年5月）に掲載予定である。一方、オランダの歴史系博物館に関する調査成果については、担当する博物館学芸員資格関連科目（「楽しい博物館」「情報メディアと博物館」）のなかで紹介し、日本における歴史系博物館の展示内容・方法と比較しながら、日本の歴史展示の方向性を世界的・客観的な視点を通して考える機会を提供する予定である。